

# 黒本『菊花千金猛』について

有働裕

本稿は、都立中央図書館加賀文庫所蔵の草双紙『菊花千金猛』について、写真版と翻刻を掲載し、簡略な注釈と解題・解説を付したものである。

## 一、解題

『補訂版国書総目録』は、本書について次のように記載している。

菊花千金猛 きくのはなごねのいさおし 二卷 〔黒本〕 〔鳥居清経画〕

〔文明和元年〕 〔日比谷加賀〕

また、『日本小説書目年表』には、「徳川時代 黒本」の「明和元年甲申年出版」の項に、

○菊花千金猛 きくのはなごねのいさおし 二 鳥居清経画 鱗形屋

とあり、『加賀文庫目録』には、

8723 菊花千金猛 きくのはなごねのいさおし 函19―20

鳥居清経画

とある。いずれも画工を鳥居清経、刊年を明和元年とするが、確証はない。これについては解説で詳しく述べる。

本書の輪郭を、以下に記す。

表紙・題簽 表紙は原のものか。黄土色。縦十八・〇センチ、

横十二・九センチ。題簽は後のもので、「菊花千

金猛 全」と墨書。縦十二・三センチ、横三・〇

センチ。

縦十五・七センチ、横十一・五センチ。

「きくの花」の下に、一〇十の丁数を記す。

十丁。二巻合一冊。

記載なし。

一丁表の屋標より鱗形屋。

なし。

刊記・広告

板元

画作者

紙数

柱刻

本文匡郭

## 二、翻刻と注釈

翻刻にあたっては、仮名遣い・清濁はすべて原本のままとしたが、適宜句読点や鉤括弧を補い、改行を施し、脱字と思われる部分は（ ）で補った。また、ひらがなを漢字に置き換えてルビを付した。したがって、翻刻においてルビのない漢字は、原文でも漢字で表記されているものである。

翻刻および注釈中の引用部分の漢字の字体については、現行の一般的なものに改めた。

《二丁表》

〔翻刻〕

その昔、鎌倉の名越の百姓、二人の男子を持つ。兄はかう蔵とて、力強し。弟は盲人にて、慶みつと申て、機転才覚の座頭あり。人々おもしろく思ひ、何んても鼻でかいで当る事を、奇妙とする。

「座頭、これは何印だ。かいでみて当給へ。」

「どれく、扇さ。しかも、石州の御影堂ときています。」

「てんとこれは、奇妙く。」

〔注釈〕

○名越―鎌倉の町人の居住地域のうち、夷堂橋の北を小町、南を大町と称した。その大町の東部にある谷を特に名越町と呼ぶ。

(P. 27 図版参照) ○石州―石州骨の扇のこと。江戸吉原の遊

女石珠が考案したとされ、骨が細く、茶人などに好んで用いられた。本来は「石珠骨」であるが、あやまって「石州骨」と呼ばれるようになったという。

○御影堂―京五条室町の新善光寺で製された扇で、最上品とされた。同寺は、信濃善光寺の如来を模したことから御影堂と呼ばれる。この扇は、平敦盛の室であつた蓮花院尼が、ここに閑居して扇を作り出したことに始まるという。「御影堂の扇、伏見のうちわに、風匂ふ香堂前の棕」(『東海道中膝栗毛』七編上)

《一丁裏・二丁表》

〔翻刻〕

そのころ、切通しの辺に、狐化けて様々往来を悩ますゆへ、北条家より番を付、此狐を捕らへんとするに、手に入らず。番の者、毎夜の事なれば、ちと退屈の折から、ある夕暮、糸売の女来る。侍衆、此色に迷ひ酒の相手にして鼻毛を伸ばす。

「糸めしませく。糸は様々、本町二丁目でござんすはいな。」

「てんと美しひのめ。此仕内を、梅幸が女形の時しました。大出来く。」

「此きすは、滝水そうな。ちと辛口だ。大門通の丹波屋へ七ツ梅を忒升ばかり取りにつかはせ。われらは、とつちりと北山三寸。あゝ、こゝらで鯛の味噌吸とでたい。」

「おまへさんが酒をあがるまいで、あの嘘ばかり。」

「そもしの注ぎかけ山なら、いかほども飲め印。ちと、くしけきやうだいでも歌いなく。」

〔注釈〕

○本町二丁目―「糸屋娘踊」によるか。「本町二丁目とんくく（中略）糸屋娘は二十一、二十、」（『落葉集』）

○梅幸―P.35参照。○きす―酒の隠語。○滝水―神田和泉

町四方酒店で売られていた銘酒。四方の滝水。○七ツ梅―当

時の銘酒。解説参照。○鯛の味噌吸―一杯飲もう、の意の洒

落。○くしけきやうだい―未詳。

《二丁裏三丁表》

〔翻刻〕

番の人々、糸売が美しきにあやなされて酒に酔ひ、皆々ところ  
くと眠りし間に残らず頭を剃られ、くり／＼坊主にされる。  
「そなた衆も、明日からは、はつ山おさますといふて歩きや。  
よふ似合しました。」

「これでは代官様から、御褒美がたとと出ましやう。さぞ皆うれしかろ。」

代官猪熊徳藤太、此事を聞き、

「近頃たわけたる者共がありさまかな。」

と此もの共残らず裸にして、あほう払ひにせらる。

「おのれら、人でなしめら。それ、ぼつ払へ。」

「さて、代官様の御叱りでござります。何事も御猶免、お助け  
なされて下されませ。ほつほほう。」

「まあ／＼、たゝかれぬ先に、逃ませう。寒ひ／＼。」

〔注釈〕

○はつ山おさます―未詳。乞食坊主の物乞いの文句か。斎藤月  
岑の『百戯述略』（明治初年成稿）には、文化文政のころ、物  
乞い達が、初秋に「初山はつやま」と呼びつつ、傀儡師の首掛  
芝居のような物を棒の先に仕付け、銭を乞いながら歩いたとあ  
る。初山は霊山にその年初めて参詣することで、特に大山参を  
いう。

《三丁裏四丁表》

〔翻刻〕

（高札）「離山の化け狐退治せし者は、褒美望みにまかすべし月日」

「此狐なか／＼たやすくは捕へかたし。」

とありて、番をやめられ、若宮小路に高札を立て、

「件の狐退治せし者には、褒美望みにまかすべし。」

と有。往来の人々読みて、いかさまといふ。

かう蔵したゝか者なりければ、此事何よりやすかるべしと、代官様へ願ひゆく。

「此狐をぶつちめる事は、子猫を捕らゆるよりいとやすし。なんでも十わりとしまして、御褒美をもらを。」

かう蔵、鼠の油揚げをすこたま揚げ、御定まりの罌をしつらひ、切通しの辺をうろつく所へさどもの侍、

「片付けく。」

と来たる。

かまはず狭き所にたゝずむ。かゝる所へ北条家通り給ふ。

「緩怠なるやつかな。」

とて大勢かゝり、かう蔵を括し上げる。

「なんだ、片付けとはふさ／＼しい。をれを紺屋の手間取りだと思ふか。そんな張込みなと喰ふやふな鼻つたらしではないぞ。あゝつがもない。」

〔『鎌倉攬勝考』（『大日本地誌大系』卷十九）による〕

《三丁裏四丁表》〔注釈〕

○離山―鎌倉と大船の間の田中にあった丘。現在は宅地化されている。上図参照。○若宮小路―若宮大路。「一の鳥居の前東西へ通町を、東鑑には、横大路と有。一の鳥居より、大鳥居までを若宮大路とあり。今は縦横ともに、若宮小路と云なり。」（貞享二年『新編鎌倉志』）○鼠の油揚げ―「若狐どものかかるこそ道理なれ、上々の若鼠を油揚げにしておいたほどの」（狂言「釣狐」）○さどもの侍―未詳。○片つけ―「片寄らっしゃい」「片寄せ」などと同様の、大名行列等の先払いの文句。○緩急―無礼、無作法。

《四丁裏五丁表》〔注釈〕（一）

○中村歌右衛門―初世中村歌右衛門。一七二四―一七九一。主として京阪で活躍したが、しばしば江戸へも下り、四世市川団十郎と義兄弟の契りも交わしている。とりわけ実悪に秀でていた。宝暦四年に上上吉、安永元年に功上上吉、天明元年に巻軸功上上吉に進んでいる。○一見阿字五逆消滅―卒塔婆に記す経文。梵語の第一母字を一見すれば仏教の重罪である五逆罪が消滅する、の意。○流転三界中、恩愛不能断、棄恩入無為、真実報恩者―天台宗などで得度の際に唱詠される辞親偈。真実の報恩のために、三界（欲界・色界・無色界）を離れて妻子との愛情を断つことを説く。『法苑珠林』卷二十二に引かれ、『源氏物語』『平家物語』にも用例がある。

《四丁裏五丁表》

〔翻刻〕

「大家の御通りもよけず、路地を妨ぐる罪よんどころなし。」  
とて、その場をさらず首打たるべきに定まる。

「さて／＼憎ていな。太々しい中村歌右衛門といふつらでござります。」

「いかに愚人め、今が最期じや。観念ひろけた。」

かゝる所へ、さも貴とげなる御聖来り。此ていを見て見るにしのびず、彼が命乞ひし給へども、なか／＼聞き入給はず。

「まことや、一見阿字五逆消滅と聞く時は、沙門の身として罪人を救はすんばあるべからず。すなはち御目通りにて彼を出家得道致させ、愚僧が弟子となし、名をば、ぬつへい坊と付申なり。」

とて、弟子のゑきうんに申付、くり／＼坊主にする。

「流転三界中、恩愛不能断、棄恩入無為、真実報恩者、南無阿弥、合点か／＼。」

(道標)「是より東 山の内 戸塚へ二里廿丁」

〔注釈〕 (二)

○ぬつへい坊―鳥肉や油揚げなどと野菜を煮とろみをつけた料理の濃餅(ぬつべい)を、狐と油揚げの縁でもじつて僧名としたものか。



《五丁裏》

〔翻刻〕

かう蔵夢くらむの心地こころにて頭あたまを剃そられ、呆然ぼうぜんたり。今まで諸侍しよざむらひ御ごせう様さまと見みへしは、たちまち野狐やこ共どもと変かじ、へつへう坊ぼうをはやす。

「重ねてからは、これ坊主ぼうず、夜道川よみちたち、物の陰方かげかた、あらそひはいらぬもの。ぬつへいほうく、すこんこんく、くわいく、くわい。」

と、尻しりを三振りみつふり高く、草隠くさかくれる。

「南無三なむさん、われらも削けり回まわしときた。」

〔注釈〕

○へつへう坊―「ぬつへい坊」の誤と思われる。○夜道川たち―諺の「夜道川だち馬鹿がする」による。危険であるにもかかわらず夜道を行くことや、川で泳いだりすることは、思慮の深い者のすることではない、の意。○けづりまわし―僧をののしって言う語。頭髪を削り回している者の意。医者にも用いる。

※ここまでの展開は、狐に関する昔話の「髪そり狐」という類型のものである。この話は、全国各地に分布しているという。後半については未詳。『新編鎌倉志』巻四には、志一上人に仕えた狐が一夜の内に鎌倉と筑紫の間を往復した、という話が載るが、本書の展開に類似した話は見当たらない。

《六丁表》

〔翻刻〕

村の衆、日待の晩に庄屋殿へ集まり、四方山の話の上、「かう蔵がまた狐に化かされ、迷惑する。」と云。

「総体普段いきすきた男でんす。さもありそうなとき。弟の座頭も、上方からも帰る時分であらうのふ。」  
「いや、今晚は何もいたさぬ。さゝぎ飯に葛に筍干、それ迄じや。よしかく。」

〔注釈〕

○日待―正月や五月九月の吉日に、前日から潔斎して眠らずに日の出を待つて拜むこと。酒宴・遊興的なものも多かった。日祭、影待とも。○さゝぎ飯―ささげ飯。ささげの実を炊き込んだ飯。「ささぎ」は「豇豆」の変化した語。○筍干―干した筍を鮑や鳥肉、魚などと煮込んだ料理。

《六丁裏七丁表》〔注釈〕（一）

○衆分―官位を求める盲人は、京に上つて職屋敷へ行き、官金を収めてまず「打掛」の位を得、次に「衆分」となる。衆分から座入りが認められ、座頭と呼ばれた。○四度の座頭―座頭の位は一度から四度に分けられ、最上位の四度を「在名」といい名字が許される。

《六丁裏七丁表》

〔翻刻〕

さるほとに、座頭慶みつは衆分の官より四度の座頭の坊にならんと心かけ、上方辺をさまよひ、今五十両しこため、ひとまつ故郷へ帰らんと、仲間二三人組合ひてさ川を渡る。

「ご座頭、危ない。合点かゝ。」

その有様、杖と杖とくゝりつけ、これに取付かせて、先達に慶みつ立ちて、何の苦もなくうち渡りに渡る。

道行く旅人、

「さてゝ、味な分別かな。」

と感しける。

「いかに勝とみ、そなたは腹か減りはせぬか。何個で十六もりてもしてやらぬか。此宿には味な事で、薩摩芋か米はかりで気がつまる。」

「晩の浚へはめりやすにして、「花の宴」「相生獅子」の手を弾いてみましょう。」

「合点じやゝ。」

（道標）「西は大磯領 東は小田原領」

〔注釈〕（二）

○さ川―酒匂川のこと。富士山東麓を源とし、足柄山に入り、小田原の東で相模湾に注ぐ。逆川、佐河とも。 ○何個―P. 36 参照。 ○花の宴・相生獅子―P. 36 参照。

《七丁裏八丁表》

〔翻刻〕

かう蔵、狐退治の事心やすげに御受け申、しそこない、頭剃られし段不届きとあつて、水牢に入らる。か（ゝ）る所へ座頭立帰り、此おもむきを聞き、すぐに代官所へ罷出、狐退治の事、御願ひ申。

「目あきでさへ是まで幾度も仕損する。まして盲人のみすから、中々かなふましき。」と語らる。

「御尤に奉る。」とて、懷中より金五十兩取出しさし上、

「此事をもし仕損ないたるならば、此金召し上らるべし。又、それがし、かの狐を捕らへ参らは、御褒美として、無官のわたくしを、勾当の官にあそばし下さるべし。」

と願ふ。座頭が面魂、御悟りあつて許し給ふ。

「目明きでさへし損のふたるに、盲目の身て汝、合点がゆかねと、此金子をさし出し、願ふ心底もちろんなり。しからは件の所へ参、事しあふせてまいれ、座頭よ。」

「これは飲みこまぬものだ。正真のめくら垣覗きとやられてこさう。」

〔注釈〕

○勾当の官―検校・別当に次ぐ盲人の官位で、座頭の上。○めくらの垣覗き―役に立たないことのとえ。

《八丁裏九丁表》

〔翻刻〕

座頭慶みつ、腰に細引をつけ、件の切通しへ参、ありもせぬにめくらの名を呼ぶ時に、かのきつ印、小僧めくらに化け、慶みつがそばへより、

「いかうくたひれた。われを助け給へ。」

といふ。座頭さあらぬていにてわが肩に負ひ、かねて用意の細引にて、わか身体と共にくるくとしたゝかに縛りつけ、帰る。

「やれ、をれが弟子のせいかつよ。なせ遅れた。くたびれたかわいやく。」

「さてく、一遍われを採した。なんとして後へ下かつた。それだから子ともには大人かつかねば、歩かせられぬ。」

「もふくたひれは退きました。降ろして下さい。なせ縛らしやつた。」

「われが小さくて、落した時には危ないから、をれともにくもりつけた。まちつと行けは、饅頭をすこたま与ゆる。黙つてあよべ、小僧よ。」

〔注釈〕

○細引―麻をよって作った細引縄のこと。漁網に用いたり、罪人を縛ったりするのに用いた。○件の切通し―狐の現れるのが離山方面であることを考えれば、巨福路坂の切通しのことか。

《九丁裏十丁表》

〔翻刻〕

座頭慶みつ、こめくらを背負ひ、汗水になつて代官所へ来りける。人々これを見るに、あやしげなる小座頭を負ひて来る。大勢かゝり、かの小座頭をくくりてうつばりに釣り上、松葉にていぶし、上けつ降ろしつせしかば、たちまちさもすさまじき古狐なり。すぐに打殺して川へ流す。

「さてく座頭が手柄の所、序開きから打出しまで、大当りく。さりながら、こいつさぞ捕らゆるには、面倒であつたらう。」

「仰のごとく、いやはやたいていなふと印な狐ではござりませぬ。そこらは、われらがぬかりなしに、腰に細引を付まして、やにわにくくり付しました。」

「さぞく、まづ祝ゑに鯉の刺身で、木綿屋の七ツ梅を申つけよふ。」

「角内、くらわせろ。」

「さてく、此狐は地犬より大きな。ぶつちめたく。」

〔注釈〕

○うつばり―柱の上に渡して屋根を支える木材。○松葉にていぶし―狐狸の類が人間に化けても、青松葉でいぶせば、その正体を現すと言われている。「青松葉の屑を恐れて、みづから妖の皮を脱」（『鶉衣』後編）○木綿屋―解説参照。

《十丁裏》

〔翻刻〕

狐退治の、盲人の身として、目明きもならぬ大手柄。北条家聞こしめし、望みのことく勾当の官になされ、御褒美とあつて、金千両給はりしぞありがたき。

物事は耳で聞き、鼻でかいでその事を弁つるとて、自ら名字を花菊勾当と名乗り、し損ないの兄か罪も、御免あること、ひとへに花菊がいさほしなり。

「今日よりことばも改めまして、いかに花菊勾当の御坊、御出世目出度仕ます。」

「さぞ御満足でござりましょ。」

《一丁裏二丁表》〔注釈〕

○梅幸―初世尾上菊五郎の俳名。享保二年（一七一七）～天明三年（一七八三）。『梅幸集』（天明四年刊）付録の「尾上菊五郎一代狂言記」によれば、京都に生まれ、尾上左門に入門、享保二十一年に嵐小六座に出て初めて若女形の部に加わった。寛保二年に市川海老蔵について江戸へ下り、同三年の『振袖信田妻』のなにはづ・葛の葉、『石居太平記』のおいと役などで上上黒吉となる。寛延二年には『仮名手本忠臣蔵』で勘平・おかるの二役で評判になるが、宝暦二年十一月市村座の「梅桜仁蟬丸」で元服し、立役となっている。一丁表には、「此仕内を梅幸が女形の時しました」と記されているのが、具体的にい

つの演技を指すのかは不明である。

『六丁裏七丁表』〔注釈〕

○何個——一文銭や碁石などを手に握り、その数を互いに当て合う遊戯。博奕にもなった。○花の宴・相生獅子——『花の宴』は箏組歌で石塚校りう一の作曲という。『源氏物語』の「花宴」に取材している。『相生獅子』は長唄舞踏曲で、杵屋宗家七代喜三郎の作曲かと言われている。享保十九年一月、中村座で初代瀬川菊之丞が初演。

三、解説

(1) 鳥居清経の「初期作品」と本書

解題にも記した通り、本書『菊花千金猛』については、『補訂版国書総目録』『加賀文庫目録』ともに、明和元年の刊行で鳥居清経画と記している。事実であるとするならば、この作品は鳥居清経画の草双紙の中でもかなり初期のものであるということになる。

鳥居清経の活動時期について、水谷不倒氏は、「彼れの画作生涯は比較的長く、宝暦七八年から、安永八年まで二十三年間続いたとしている（注1）。しかし、浜田義一郎氏は、宝暦以前の刊行とされていた作品を検討して、清経の初作の時期を宝暦末、あるいは明和元年に繰り下げる説を提示している（注2）。『菊花千金猛』の位置付けを考えるにあたっては、

まずこの問題を整理し、確認しておく必要がある。

『補訂版国書総目録』に記載されている鳥居清経の作品の中には、明和以前、すなわち宝暦年間までの刊行とされているものが、赤本と分類されている『太子かいてふ記』や滑稽本に分類されている『銀杏栄常磐八景』（青牛老人作）をも含め、十作ある。それらをその刊年順に列記すると次のようになる。

刊年不明 太子かいてふ記

延享二年 とんだ茶釜

宝暦八年 竹田大唐操

宝暦九年 近江源氏祠雛形

宝暦十年 分福功業鐘平茶釜

宝暦十一年 宮麻布一本松油之惚棗

油之惚棗

変生男子悟衣川

宝暦十二年 話加減寢蓐

銀杏栄常磐八景

だが、これらの刊年をそのまま信用することはできない。

赤本に分類されている『太子かいてふ記』は、『補訂版国書総目録』では、都立中央図書館東京資料のみの所蔵であるが、同本の十四丁裏の署名により、画工は清経、作者は米山鼎峨と確認できる。聖徳太子の生涯を題材とするが、その多くを『聖徳太子伝』（寛文六年刊本）によっている。画風・内容から見て赤本という分類が不適切であることは当然のこととして、鼎



峨の活躍期から考えれば、安永以降の作である。

『とんだ茶釜』は、本来の書名は『狸の土産』であり（注3）、その内容から考えて、明和末年から安永にかけての刊行と思われる（注4）。『竹田大唐操』は、すでに浜田義一郎氏もこの刊年には疑問を呈していたが、近年山田和人氏の考察（注5）によって、安永六年の江戸結城座の興行を写したものであることが明らかにされている。『功業鑑平』も浜田氏の指摘どおり安永元年の刊行であると考えられ（注6）、『麻布一本松』『油之惚薬』『変生男子悟衣川』の三作品も、『野暮大臣色里通』（鳥居清経画）十五丁裏の広告に記載されていることを根拠とした、浜田氏の安永二年刊行説を疑う余地はないように思われる（注7）。

残されたのは、浜田氏が「積極理由はないが、画風はもっと後のように思われる」とする『近江源氏嗣雛形』と『話加減寢薬』、滑稽本の『銀杏栄常磐八景』である。この後に続くのが、『国書総目録』で見る限り、明和元年刊の『菊花千金猛』『政道狐宿替』だが、『政道狐宿替』は「日本小説年表による」とあり、所在不明である。浜田氏は、『銀杏栄常磐八景』を視野に入れていなかったようだが、これらについて次のように結論付けている。

結局清経の宝暦の作は十二年の『話加減寢薬』（鱗形屋版）がのこるが、確証はない。次は一年おいて『菊花千金猛』（鱗形屋版）があつてそれからは毎年作が軌道に乗る

わけである。（ただしこの年はまだ絵師の連名に入っていない。）以上のせんきくから清経の初作は宝暦十二年または明和元年で、従来説より四年乃至六年おくれることになる。

となると、『話加減寢薬』『銀杏栄常磐八景』の検討は別の機会に譲るとして、この『菊花千金猛』には清経の処女作の可能性すら考えられることになる。だが、問題は、この作品に明和元年刊行、鳥居清経画の確証があるかどうかである。

## (2) 刊年の問題

『菊花千金猛』には刊記がなく、現存本の題簽は後のものである。この本を『小説書目年表』等が明和元年としているのは、おそらくは大東急記念文庫蔵の『海妖敵込』十丁裏の鱗形屋「申正月新板目録」を根拠としたのであろう。

この目録には、『菊花千金猛』『海妖敵込』を含め、十四作品の書名が記されている。明和元年は確かに申歳であり、「絵師 鳥居清倍 鳥居清満」という連名も、両者の活躍時期から見て、この刊年の妥当性を証するものといえる。ただし、『海妖敵込』にも原題簽はなく、本文中に刊年を明らかにしうる記述がない。結局のところ、この目録に記載された他の作品を精査しなければ結論は出せず、現段階では、ほぼ明和元年説を認めるものの、他の年の可能性も完全には否定できない。

『菊花千金猛』の記述の中で、刊年との関連で気になるのは、

二丁表の銘酒「七ッ梅」である。この七ッ梅について、大曲駒村の『川柳大辞典』（昭和三十七年・高橋書店）は次のように記している。

摂州池田の銘酒。其の酒樽に七ッ梅の標章を附けた。七ッ梅といふは、実は七曜の星の俗称で、これを紋所とした、田沼の全盛にあやかつた命名であつた。

この見解は、『日本国語大辞典』等の辞書類でも踏襲されている。これにしたがつて考えるならば、本書の刊行は田沼意次全盛の天明年間以後ということになり、先の目録そのものも再検討が必要ということになる。だが、管見の限りでは、田沼の全盛にあやかつて七ッ梅を標章とした、という説の根拠が不明であり、こちらの方が疑わしいように思われる。

まず、七ッ梅は池田ではなく、伊丹の酒ではないか。『伊丹市史』第四巻・資料編1（伊丹市史編纂専門委員会編・昭和四十三年）所収の寛政二年「銘酒売払い値段書上」（小西新右衛門文書）には、七ッ梅の標章が記されている。また、『日本山海名産図会』（寛政十一年刊）の巻一には「伊丹蒔包の印」と「池田蒔包の印」とが描かれているが、七ッ梅の標章は剣菱などとともに伊丹の方に記されている。天保期の「江戸積銘酒大寄」（注8）にも、「伊丹 木綿屋」の下に七ッ

### 七ッ梅の標章

梅の印しのある蒔が描かれている。木綿屋の名は、本書の十丁表にも見える。

木綿屋は、伊丹の酒造家としては古く、正徳五年の株帖にも「木綿屋七郎右衛門」の名がある（注9）。木綿屋がいつごろから銘酒七ッ梅を製造していたかは不明ではあるが、この標章と田沼意次との結び付きを明記した資料が見出せない以上、明和以前から販売されていた可能性も十分に考えられる。となると、このことは、本書の明和元年刊行説を否定する材料とはなりえない。

### (3) 画工の問題

解題にも述べたとおり、諸目録は本書を清経画としているのだが、加賀文庫蔵本を見る限り、その根拠は不明である。しかも、本書の名の見える『<sup>海</sup>陸妖敵込』の鱗形屋「申正月新板目録」には、鳥居清倍・清満の署名があるのみで、清経の名はない。

現在明かになっている限りでは、明和以前のもと思われる鱗形屋の目録には清経の名は見られず、明和五年刊とされている『<sup>音</sup>妖道成寺』の鱗形屋「亥正月新版目録」以降は、清満・北尾重政らとの連名で、清経の名が記されている（注10）。もちろん、目録にあげられたすべての作品の画工名が記されているとは断定できない。いわば駆け出しの時期にある画工名が省略されることも十分にありえるだろう。『<sup>海</sup>陸妖敵込』の目録の「申正月」が明和元年だとすれば、この目録中に清経の作品が

含まれているかどうかは、まさに微妙なところであろう。

本書の画風は鳥居派のものではあるが、それだけから清経と断定できるほど特徴的だとは思われない。例えば、一丁表の右上に描かれた人物は、着物の紋から大谷広治を意識したものである。大谷広治は二代目が宝暦七年に没しているが、鳥居清満が『役者しずかた名物略姿』（注11）に描いた二代目の広治と先の一丁表の人物の顔は極めて類似している。

鳥居派の画風が類型的なものである以上、『略姿』との類似のみから清満の作と断定することは無理である。だが、当然のことながら、清経とするのもまた難しい。初期の作品だからと言われればそれまでだが、清経のものにしては、若干線が太く丸みを帯び、繊細さに欠けるような印象も受けるが、どうだろうか。

ともあれ、現段階では、鳥居清経の初期作品とするには、問題のある作品ということになろう。

注1 水谷不倒『草双紙と読本の研究』一九三四年・奥川書房  
注2 浜田義一郎「家墓大尺色里通の刊年と鳥居清経の初作と」

（『かがみ』四号・一九五〇年十月）

注3 新古典文学大系33『草双紙集』（一九九七年・岩波書店）  
に木村八重子氏による翻刻・注釈・解説がある。

注4 木村八重子氏は前掲書において、「明和七年二月以降と見る必然性もないと思われる」としているが、その内容

から見て、明和末から安永にかけての成立の可能性が強いように思われる。これについては、拙稿「『とんだ茶釜』について」（『叢 草双紙の翻刻と研究』十九号・一九九七年）参照。

注5 山田和人「からくり演出と絵画資料」（『近世文芸』六十一号・一九九五年一月）

注6 拙稿「『分福茶釜功業鑑平』について」（『叢 草双紙の翻刻と研究』十八号・一九九六年）参照。

注7 『油之惚葉』は『江戸の絵本 Ⅰ』（一九八七年・国書刊行会）に、小池正胤氏による解題・翻刻注釈・解説がある。『麻布一本松』は、『叢 草双紙の翻刻と研究』二十号に、有働が翻刻注釈を掲載する予定。

注8 岩井宏実編『江戸時代図誌18 畿内二』（一九七七年・筑摩書房）による。

注9 岡田利兵衛「徳川中葉の伊丹酒」（『上方』四号・一九二九年四月）

注10 木村八重子「日本小説年表 考―黒本・青本を中心に―」（『江戸文学』十五号・一九九六年五月）

注11 宝暦七年刊『新編新書複製会叢書』第十九卷（一九九〇年・臨川書店）所収。

『付記』本稿を成すにあたり、資料の翻刻・写真版掲載を御許可下さった、都立中央図書館特別文庫室の皆様へ深謝申し上げます。（うどう ゆたか）